

昭和56年度秋季特別展

松平春嶽公

# 手沢・愛蔵品展



福井市立郷土歴史博物館

昭和56年度秋季特別展

松平春嶽公

手沢・愛蔵品展



57②自然木寿星像置物

福井市立郷土歴史博物館

## 特別展開催にあたって

松平春嶽公は、郷土の誇る幕末第一の明君であります。公は、中根雪江・鈴木主税・橋本景岳をはじめとする勝れた家臣を登用し、その援助のもと、誠実一途な精神を貫いて幕末維新の激動に対処し、重要な役割をはたしました。同時に公は、幕末諸大名中第一等と称して過言でない学問の人であり、風雅の心篤い文人でもありました。

そうした春嶽公が、生涯を通じ愛用し愛蔵した品々は、他の諸大名のそれに比較すれば、誠に質素で飾気のないものであります。中には、高名な画家・書家・工芸家などの手になる逸品や、極めて豪華な品も含まれていますが、それらは殆ど先祖伝来の家宝であったり、他から贈られたりしたもので、公自身が高額で買い集められたような品は、一点もありません。それだけに、全体として、十代の頃より希代の儉政を断行した春嶽公らしい気風に満ちあふれております。

当館では、これまで未公開の館秘蔵資料を中心に、右のような春嶽公の手沢・愛蔵品の展示を計画し、今回の特別展を開催する運びとなりました。展示いたしました品々は、すべて春嶽公遺愛のものばかりで、特に公自ら愛蔵の旨注記されておるようなものを選びました。

この展観により、上品で雅趣に富み、しかも質実な春嶽公の気風を、少しでも御理解いただけますならば、幸甚の至りでございます。

昭和五十六年十月一日

福井市立郷土歴史博物館

## 凡例

一、本書は昭和五十六年十月一日より十一月五日までを会期とする、昭和五十六年度秋季特別展「松平春嶽公手沢・愛蔵品展」の解説総目録である。

一、本目録は、前半部に主要展示資料の写真を収め、後半部には展示資料を「一、絵画」「二、書跡」「三、文具」「四、各種調度」「五、その他の手沢品」の五部門に分類し解説してある。

一、後半部解説部分の各史料に付した「史料通し番号」は、本目録内の写真に付した番号とすべて一致し、福井市立郷土歴史博物館に於ける実際の展示品に付した史料番号とも共通している。

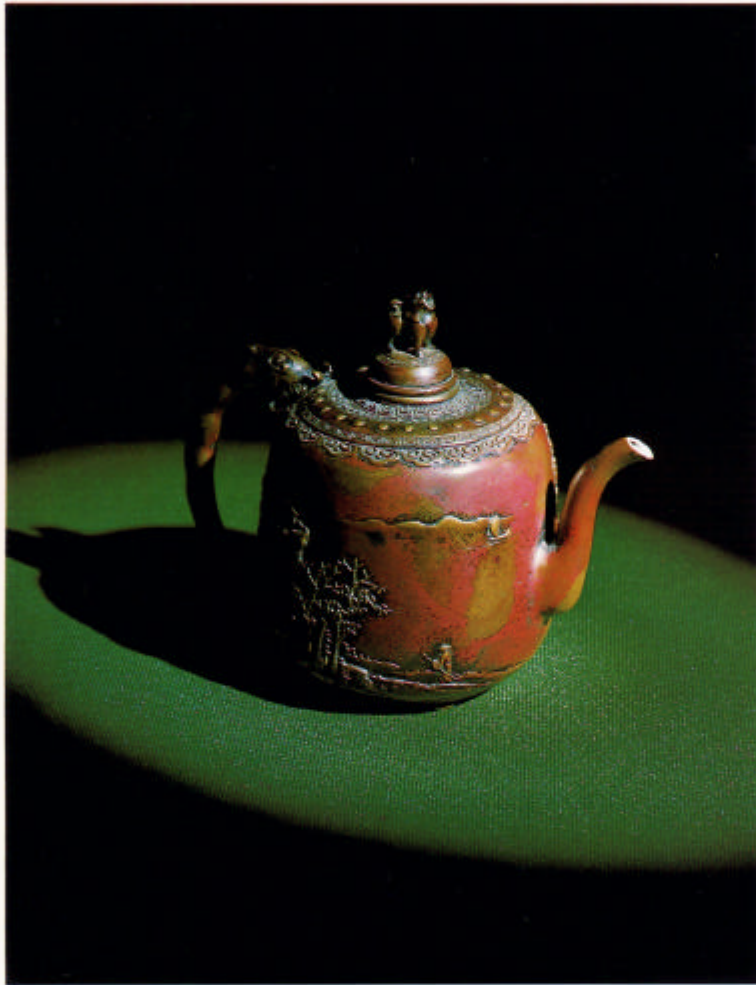
一、収録（展示）資料は、すべて福井十六代藩主春嶽松平慶永の手沢・愛蔵品であり、福井市春嶽公記念文庫を中心とする本館収蔵のものばかりであるから、いちいち所蔵者を明記することをしなかった。

一、会期中、本目録内の資料の展示換えや、目録以外の史料を展示することもある。

（表紙カラー図版は、史料番号(4)谷文晁筆 叢竹の図屏風 六曲一双の一部である。）



04 実父仇英筆 瀑布眺望の図



(35) 本間琢齋作 斑紫銅水滴

一、繪  
画



(1) 探幽野守信筆 寒江独釣图



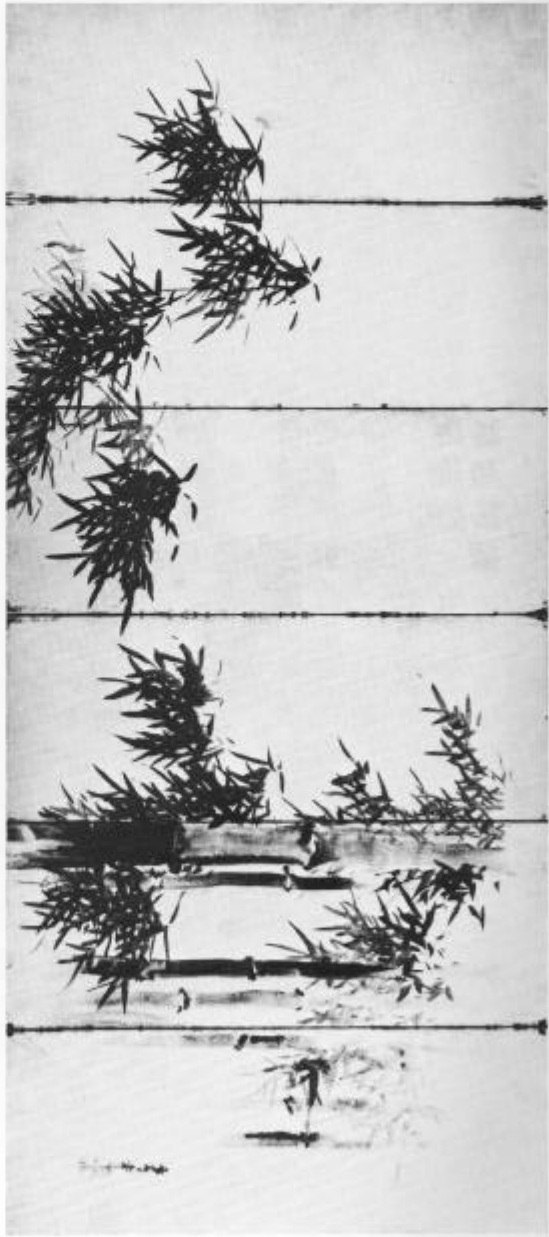
(3) 養朴狩野常信筆 東方朔・松に鶏・竹に雉の図



(6) 遠坂文雍筆 蝴蝶牡丹図

天保九年戊午一月廿三日由安永より引程之師 荷水  
 遠坂文雍 牡丹之図  
 慶永書





(4) 谷 文晁筆  
叢竹の図屏風



(5) 谷 文晁筆 青綠山水圖 (文政八年冬作)



墨竹華山巻

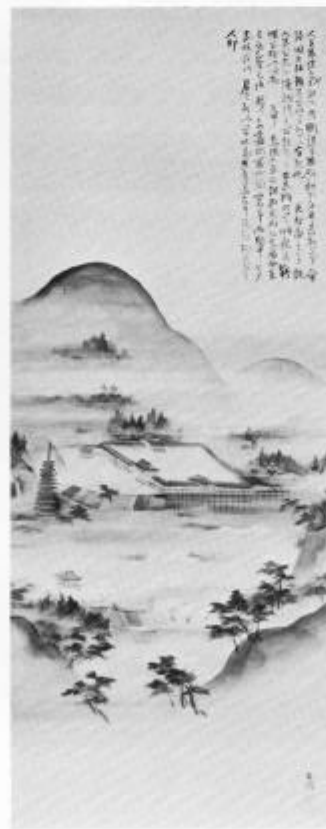
(7) 渡辺華山筆

墨竹の図

去冬於此玩



(10) 春木南溟筆



山内容堂贊  
高雄・多武峯の図



(16) 靈照女図



(17) 梁楷筆 唐松仙人図

石川華  
唐松仙人図

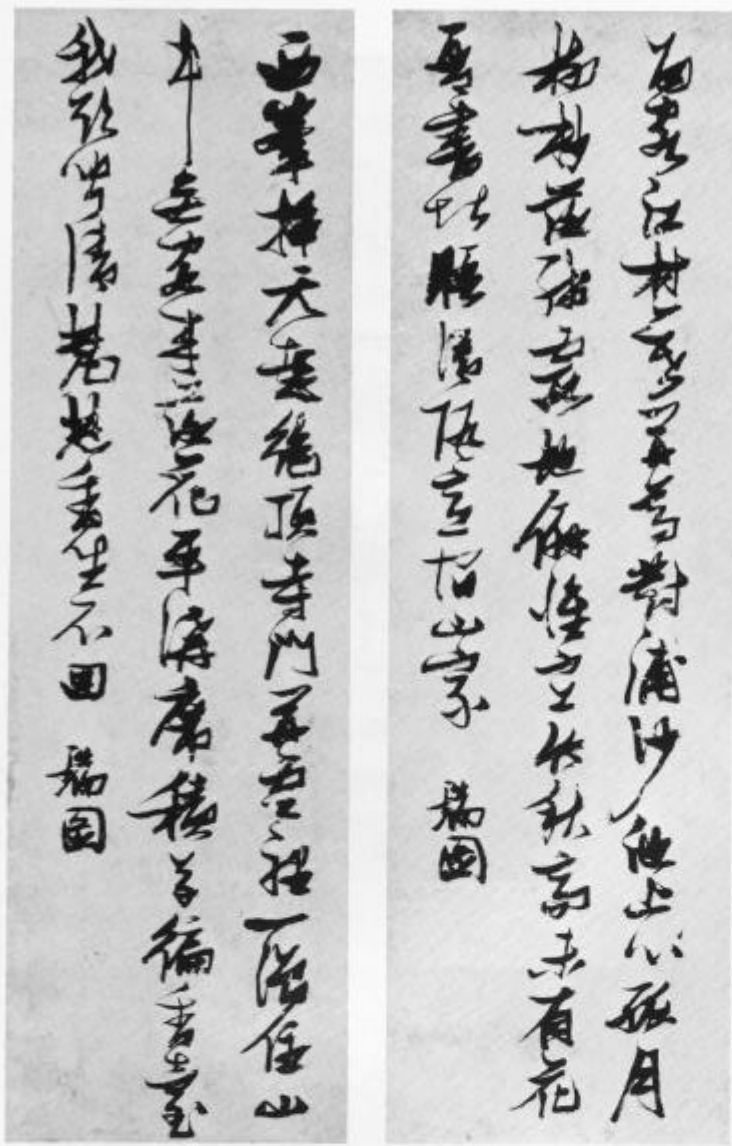


(15) 実父仇英筆 華弁御遊の図

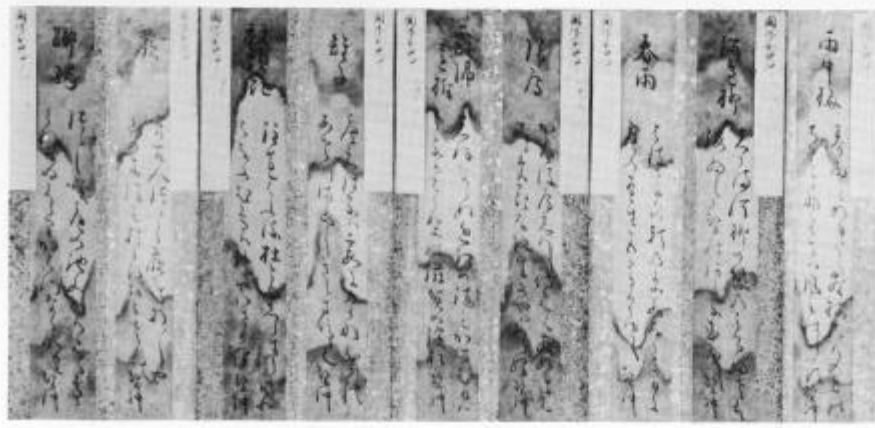
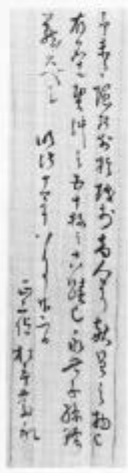


(13) 趙子昂筆 柳に野馬の図

二、書 跡



(18) 張瑞図筆 留客江村・西峯挿天の詩



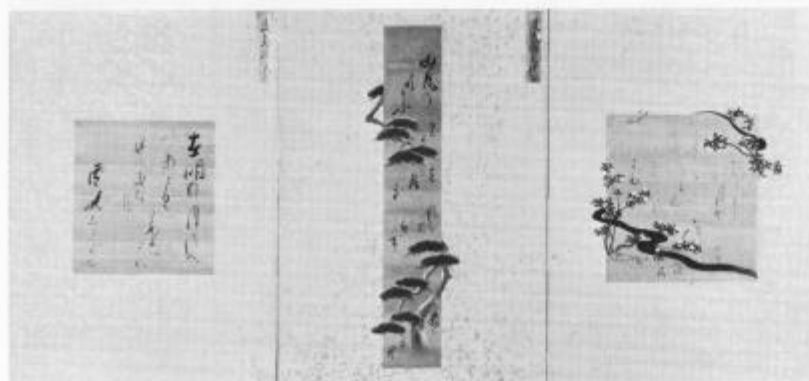
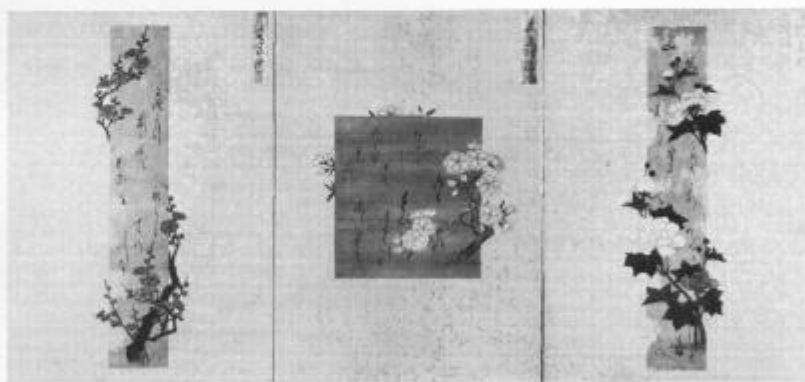
(19) 僧 契冲筆 和歌短冊の折本



二月十日の夜風をけー  
 かりけのふ  
 墓之前松  
 正之  
 月のまはあしとみれぬるる道神や  
 しままゆらふしやハ新々れぬ  
 正之  
 いそやけり新々ぬきを身かあそ  
 いとくはとあはれを  
 正之  
 前松  
 正之  
 かけぬと  
 正之  
 正之

高山彦九郎筆  
 叔父正業墓前

②6 高山彦九郎筆 叔父正業墓前献歌

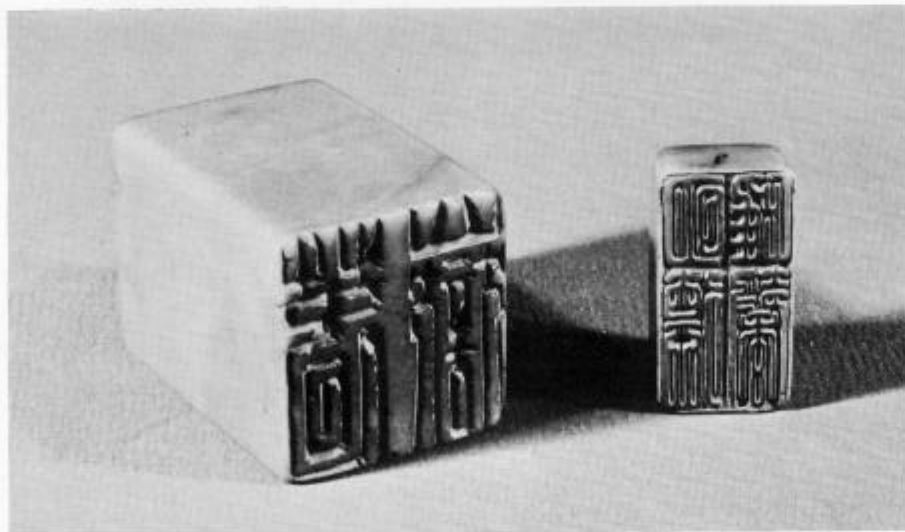


②7 松平定信筆  
 古歌手鏡



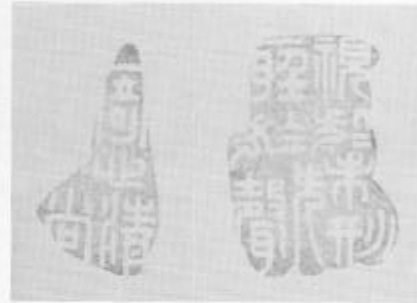
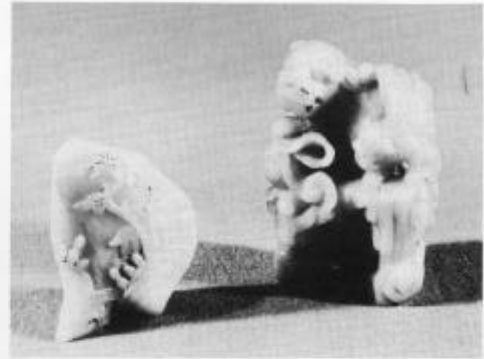


(33)安島帯刀・茅ノ根伊予之介・橋本景岳筆  
「三友遺墨」の幅



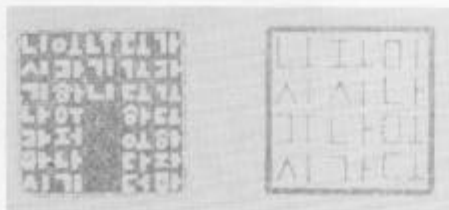
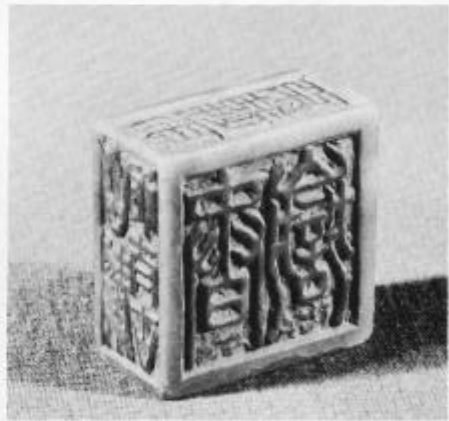
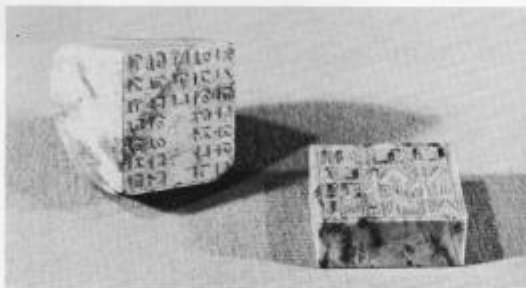
(34)落款印章類  
河崎致高刻

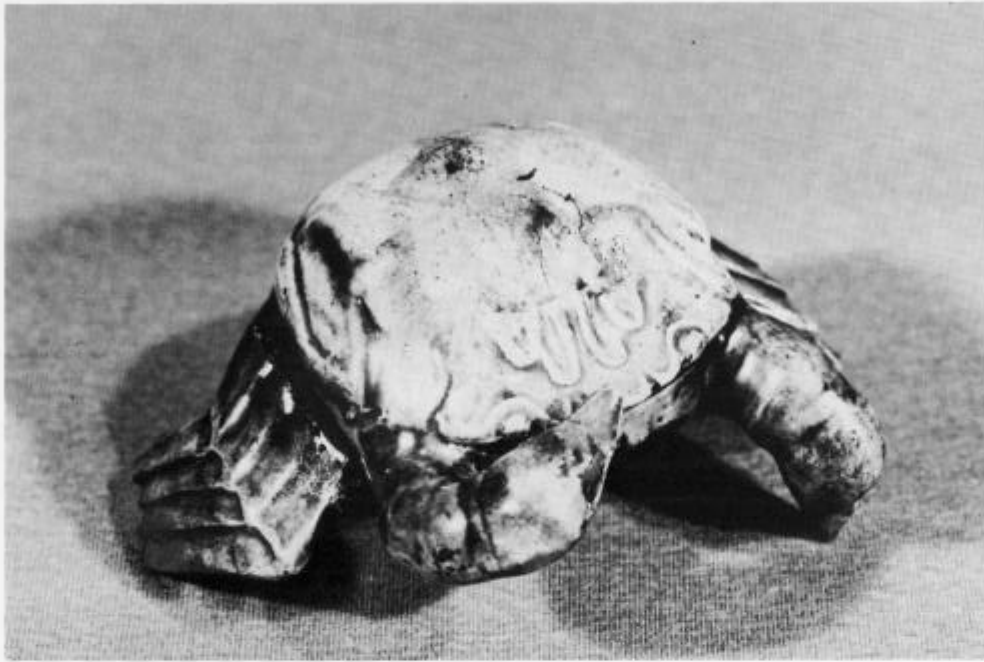




34 落款印章類

神代文字の印

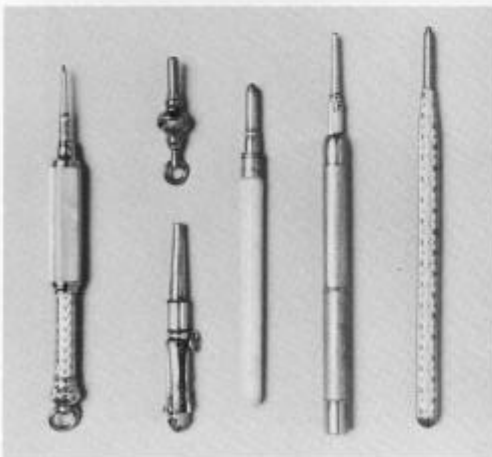




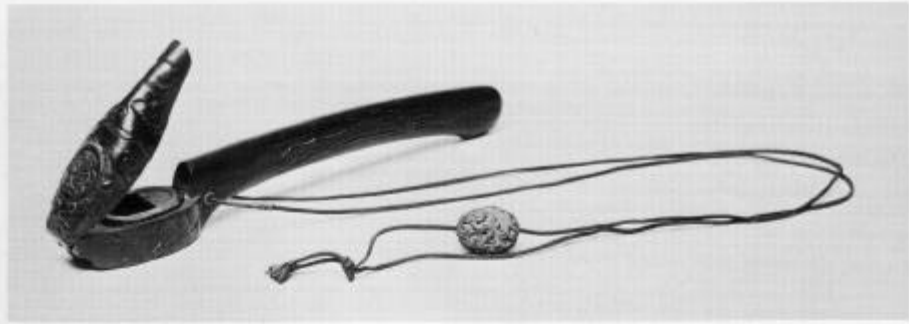
36②交趾焼 蟹形筆架



36①島 雪齋作 筆 架



(40) ドイツ製シャープペンシル

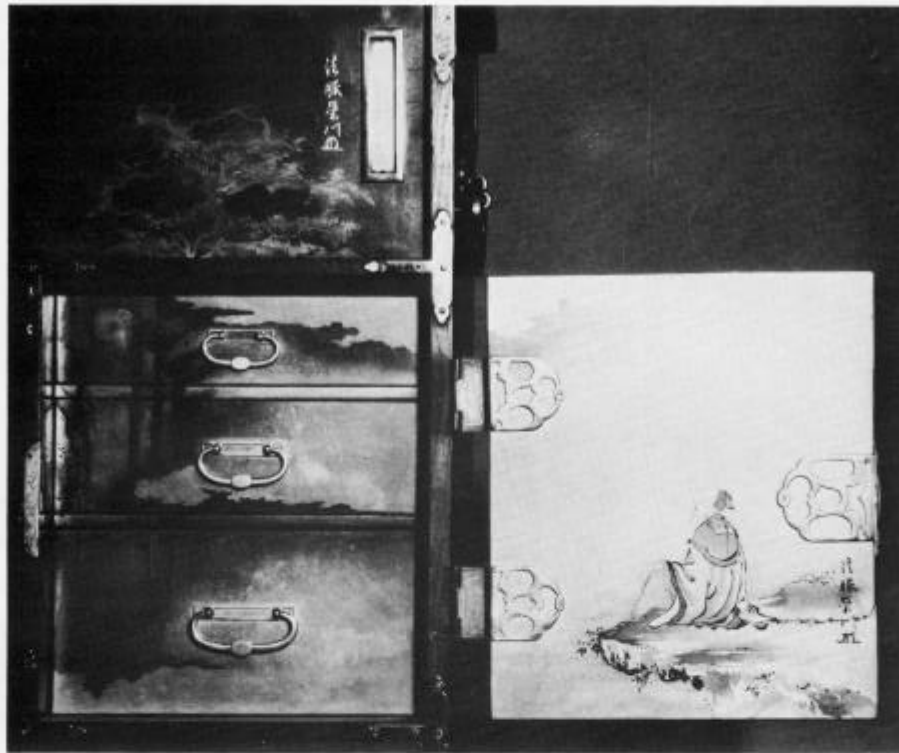


③ 島 雪齋作 矢 立



(4) その他の文具類

四、各種調度



(42) 瀑布眺望時繪桑製小箆笥・同部分



(47) 四季花模様蒔絵  
火屋付手焙





(43) 堆朱小篋筒  
田安齊匡遺品



(48) 梨地藤棚模様蒔絵提重



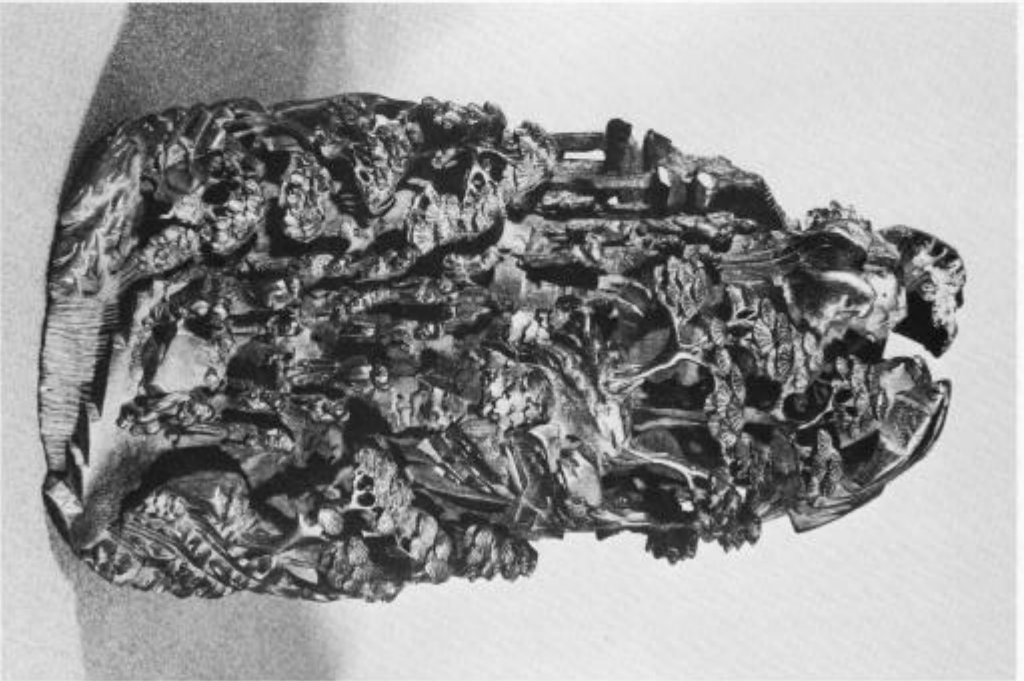
53 銅製登龍門香炉



52 銅製籠形香炉  
銘「大明宣德年製」

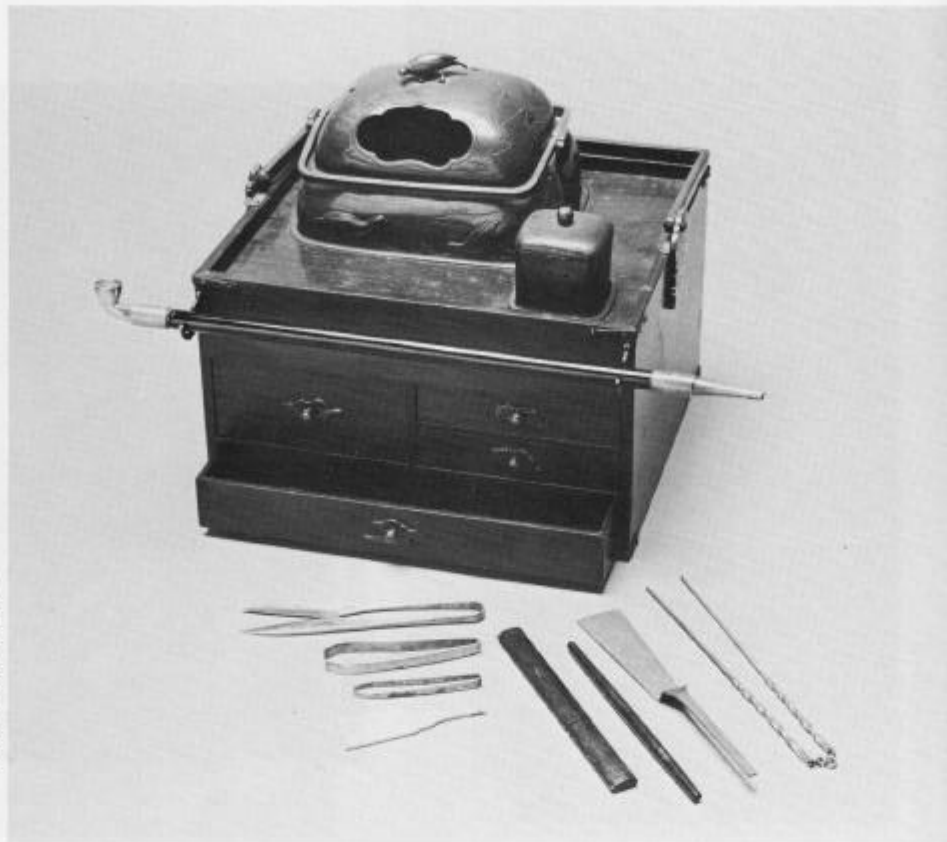


磯島 雪齋作 柿本人麻呂像

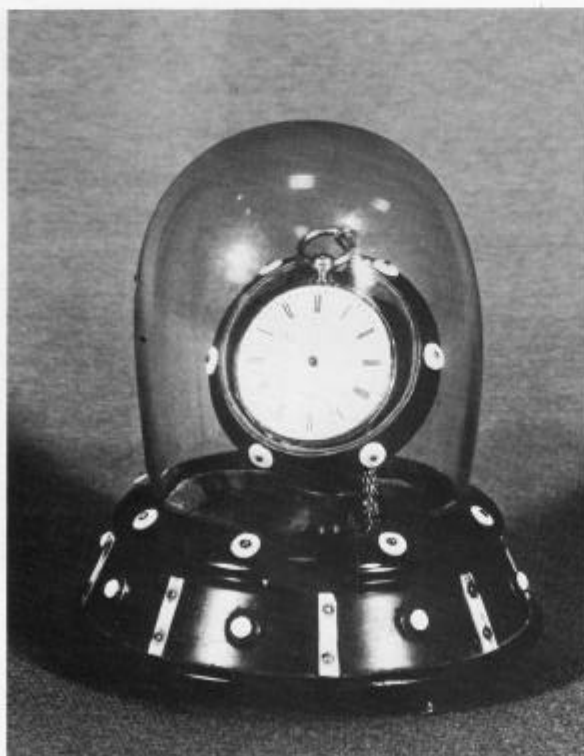


磯①島 雪齋作 百老竹置物



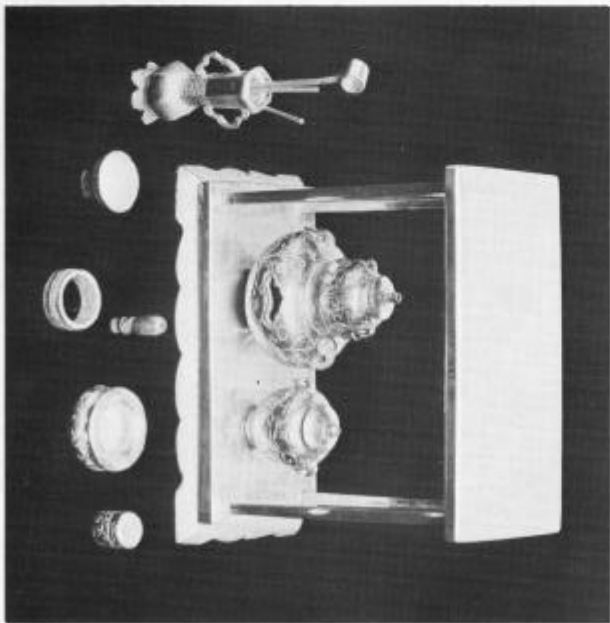
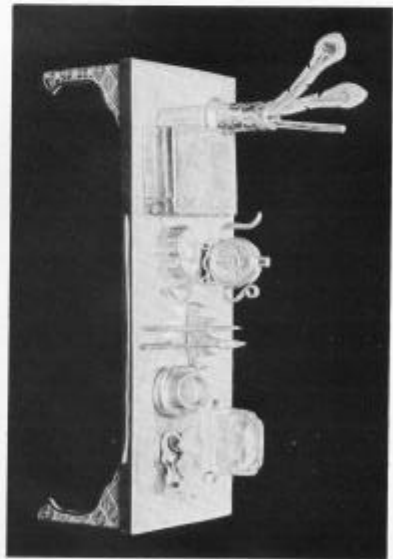
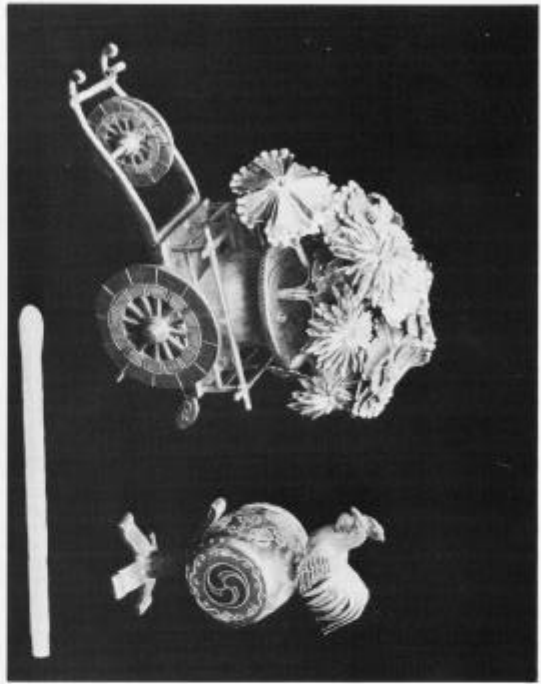


55 紫檀製提煙草盆



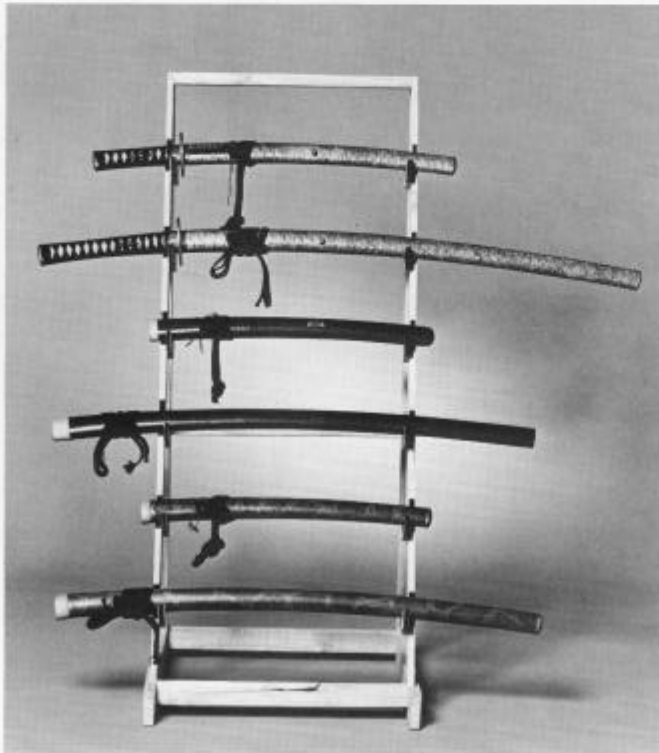
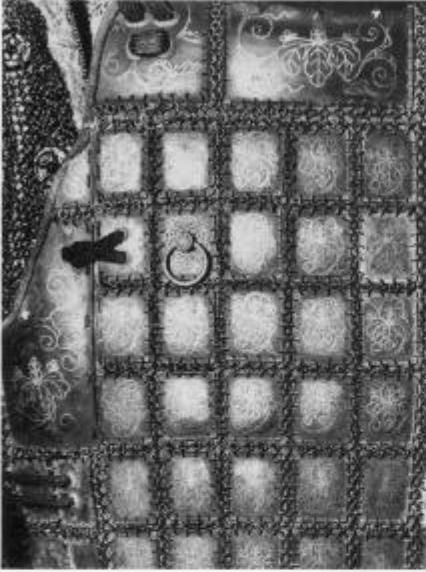
61 ③④ 舶来懐中時計・時計掛

五、その他の手沢品



例 御拝領御大切之御細工物

66 骨牌札疊具足  
同部分



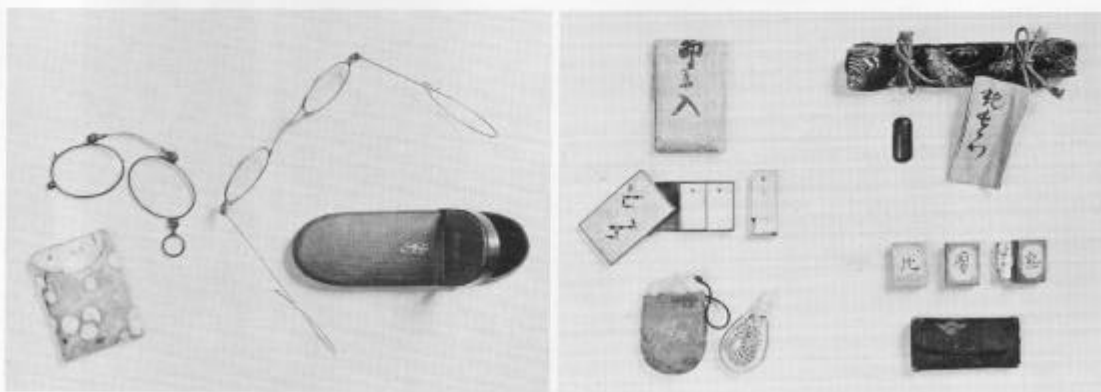
64 常用大・小刀拵



680 ① 烏 雪齋作  
伽羅木白衣觀音線香建



680 ② 象牙雲龍彫線香建  
④ 木実製十六羅漢数珠



680 常用手廻諸道具類

昭和五十六年度秋季特別展

松平春嶽公

## 手沢・愛蔵品展

### 解説総目録

#### 一、絵画

(1) 探幽狩野守信筆 寒江独釣図 絹本墨画

一幅

〔狩野探幽〕

慶長七年（一六〇二）狩野孝信の長子として生まれる。名は守信、探幽齋・白蓮子・筆峰大居士と号し、宮内卿法印を称す。鍛冶橋狩野家祖。はじめ狩野興以に学び、更に和漢諸家の画法を学んで、狩野家の画法に新技法を導入し、狩野家中興の祖と仰がれた。

慶長十七年（一六二二）徳川家康に謁し、同十九年には二代將軍秀忠の座前で、海棠（中国原産のイバラ科落葉灌木）下の猫を描き、祖父永徳の再生なりと激賞されたという。寛永三年（一六二六）後水尾天皇が二條城に行幸の際、御座間の高壁画を制作、同十三年「東照宮縁起」を描いて、法眼に叙せられ、宮内卿の称を許された。同十九年には皇居紫宸殿賢聖障子を、寛文二年（一六六二）には後水尾天皇の御肖像を描いて、筆峰大居士の印を賜った。

このように、探幽の足跡は、江戸狩野諸家の中で、最も重きをおき、江戸期画壇中の地位をゆるぎないものとしたが、延宝二年（一六七四）十月七日、七十三歳で歿した。

(2) 永信狩野安信筆 虎溪三笑・居雁・飛雁の図 紙本墨画 三幅

〔狩野永信〕

慶長十八年（一六一三）、狩野孝信の三男として生まれる。幼名四郎次郎、通称を源四郎・右京進といい永真・牧心齋・静閑齋・了浮齋と号した。画を狩野興以に学び、狩野宗家を継いだ。江戸中橋に屋敷を拝領し、そこに住したので中橋狩野と称し、兄の守信（探幽）や尚信とともに、奥絵師として江戸前期の画壇に重きをなした。貞享二年（一六八五）七十歳で歿す。

(3) 養朴狩野常信筆 東方朔・松に鶏

・竹に雉子の図 絹本著色

三幅

〔狩野養朴〕

寛永十三年（一六三六）、木挽町狩野家尚信の長子として生まれる。幼名三位、通称を右近といい、養朴・古川叟・耕寛齋・青白齋・紫薇翁・寒雲子・弄毫軒・朴齋・潜屋と号した。禁裏紫宸殿の賢聖障子を描き、仙洞御所の御用を勤めるなど、奥絵師として多くの業績を残し、名声高く、元禄画壇に重きをなした。また古画の鑑識にも長じ、俳諧も能くした。正徳三年（一七一三）七十八歳で歿す。

(4) 谷 文晁筆 叢竹の図屏風 紙本墨画

六曲一双

谷家は代々徳川御三卿の一家田安の御抱絵師を勤めていた。田安家に生まれた松平春嶽は、越前松平家を相続するまで十一年間を田安邸で成長したが、その間に屋敷を出入りする谷文晁と交流があり、その随筆『雨窓閑話稿』に、「文晁と酒」「文晁の偽物」等、直接文晁から聞いた話を主体に、四項目にわたって逸話を記述している。そうした関係から、春嶽はこの屏風のような文晁の傑作を愛蔵し、鑑賞したのである。

〔谷 文晁〕

宝暦十三年（一七六三）、御三卿の一家田安の家臣谷麓谷の子として生まれる。名は正安、通称文五郎。文晁はその字で、

文朝・師陵・一如居士・無二庵・画学齋・蛙齋と号した。幼少より絵をよくし、はじめ狩野派の画法を学び、さらに清人の画風や南画々法を修業した。文晁の画風は、北面を主体にして南画を折衷し、西洋画の遠近法を取入れた作品もあり、江戸南画に新技法を導入して一家を成したもので、当時江戸第一の大家と称せられた。田安家の絵師となり、法眼に叙せられ、弟子に渡辺華山・立原杏所・高久靄厓などがある。天保十二年（一八四一）七十八歳で歿す。

(5) 谷 文晁筆 青緑山水図 絹本着色 文政八年二五冬作 双幅  
(6) 遠坂文雍筆 蝴蝶牡丹図 絹本着色 一幅

松平春嶽筆軸裏書「天保九年（一八三八）戊戌十一月廿三日、田安家ヨリ引移之節持参、遠坂文雍俗名莊司牡丹之図 慶永書」

文雍は通称を遠坂莊司といい、田安家の家臣であったが、谷文晁に入門して画法を学び、画家としても名が高い。春嶽の随筆『雨窓閑話稿』には、「文晁の画」と題して、少年時代家臣文雍から聞いた文晁についての奇談が収められている。

(7) 渡辺華山筆 墨竹の図 絹本墨画 一幅

松平春嶽筆軸裏書「墨竹華山筆 春嶽愛玩」  
〔渡辺華山〕

寛政五年（一七九三）、三河国（愛知県）田原藩士渡辺定通の子として生まれる。幼名虎之助のち登、華山・寓絵堂・金楽堂などと号した。はじめ儒者を志したが、貧困のため絵で生計を立てんとし、金子金陵に入門した。優れた画才があったため進境著しく、ついに谷文晁の直弟子となって、画壇にその名を知られるに至った。その後佐藤一齋等に入門して儒学を学びなおし、田原藩の納戸役・番頭・側用人と昇進して、天保三年（一八三二）家老となり、藩の重責を荷い、海防をも担当した。

このため洋学へも関心を持ち、蘭学者高野長英などと交友、「慎機論」を著わした。しかし、これが幕府の嫌疑をうけて禁固された。このため、その累が藩主に及ぶことを恐れ、天保十二年（一八四一）四十九歳で自刃した。

(8) 杉谷雪撫筆 雪景山水図 絹本着色 一幅

松平春嶽筆添書「細川様より到来、絹地二枚 慶永記」  
雪撫は熊本細川藩士で画人としても著名であった。夫人勇姫が、熊本藩主細川齊護の女であった関係から、春嶽は早くより雪撫の作品を多数愛蔵していた。

〔杉谷雪撫〕

肥後熊本藩士。幼少より絵をよくし、父行直から画法を学んだが、青年期には江戸に出て藩務に励むなど、ほとんど絵事を離れていた。帰藩後、北宗画を研究し画技を深めたが、南宗画の流行によって雪撫の絵は受け入れられず、独り刻苦精励の生活が続いた。しかし、明治二十年上京してからは、大いに画才を発揮し、二十二年、宮内省の命で孔雀図を描いて叙賞を蒙るなど、その作品が認められるに至り、細川家でも、雪撫をして新邸のすべての屏風障壁に絵を描かせたという。明治二十八年六十九歳で歿した。

(9) 草場佩川筆 墨竹の図 紙本墨画 一幅

松平春嶽筆添書「肥前佐賀藩草下佩川 慶永記」  
〔草場佩川〕

天明七年（一七八七）肥前多久（佐賀県）に生まれる。名は鞆、通称を瑳助といい、玉女山人・濯櫻堂主人と号した。江戸の古賀精里について儒学を学び、文化七年（一八一〇）、精里に伴なわれて対馬に赴き、朝鮮使節と応接した時、その才能を認められた。帰国後は佐賀藩の儒官となった。絵をよくし、江越繡浦に入門して沈南蘋流を学び、さらに南宋画をも修めた。

慶応三年（一八六七）八十一歳で歿す。

(10) 春木南溟筆 山内容堂賛

高雄・多武峯の図 絹本着色

双幅

松平春嶽筆軸裏書「高雄図・多武峯図 春嶽愛玩」

〔春木南溟〕

名は秀熙、字は敬一。のち名を龍、字を子緝と改めた。通称を卯之助といい、啡雲漁者と号した。伊勢長島の増山侯に仕え、諸国を漫遊して研鑽につとめ、谷文晁と並んで天下の二老と称せられた春木南湖の子である。画を父南湖に学び、山水花鳥をよくした。明治十一年（一八七八）八十四歳で歿した。

(11) 僧 鉄翁筆 四季山水図貼交の幅 紙本着色

双幅

松平春嶽筆軸裏書「細川韶邦遺品 鉄翁 春嶽雅玩」

細川韶邦は幕末の十一代熊本藩主、細川齊護の長子で、春嶽夫人の兄にあたる。

〔僧 鉄翁〕

名は祖門、鉄翁は画号。大工の子として長崎に生まれ、幼少より絵を好み、はじめ石崎融思に、のち江塚圃の門に入り画技を深めた。ゆえあって長崎の春徳寺に入り出家してからは、画道と禪字を兼修して独自の画境を開き、山水花卉、特に蘭を得意とした。長崎派の画人として、その名が広まるにつれ貫名菘翁・日根村山・前田暢堂などがその門に入った。明治四年（一八七一）八十二歳で病歿す。

(12) 梁 楷筆 唐松仙人図 絹本着色 付狩野探幽極書 一幅

松平春嶽筆軸裏書「雲川筆 春岳愛玩」

〔梁 楷〕

南宋時代十三世紀初期の人。梁風子と号す。嘉泰年間（一一二〇一〇四）、書院待詔となり、画人としても高名で、人物・

山水・道釋・鬼神などを画くのを得意とした。

(13) 趙子昂筆 柳に野馬の図 絹本着色

一幅

〔趙子昂〕

中国元朝の大官。十三世紀末元代の美術界で復古主義の指導者として活躍。通称孟頫、字は子昂、松雪道人・鷗波・甲寅人・水晶宮道人と号した。宋の太祖の子孫であったが、元朝に降って翰林学士承旨となり、書画共に天賦の才能を発揮した。こ

(14) 実父仇英筆 瀑布眺望の図 絹本着色

一幅

付松平春嶽・羅晴村（石湖）筆添書

〔実父仇英〕

字は実父、号は十洲。明代随一の宫廷画家で、特に人物画・山水画に秀いでていた。

(15) 実父仇英筆 華卉御遊の図 絹本着色

一幅

(16) 筆者不詳 靈照女図 紙本着色

一幅

靈照は、唐代九世紀初頭の賢人龐蘊の子で、孝女・賢女として知られる。後世に至り、靈照は女性の代称となった、明代の古画。

(17) 朱昂之筆 松壑雲泉図 絹本着色

一幅

松平春嶽筆軸裏書「谷堂親友遺愛 朱昂之松壑雲泉 絹本 春嶽蔵」

〔朱昂之〕

清代の人。字は青立、号は津里。山水画を善くし、行・草の書にも長じていた。

## 二、書 跡

(18) 張瑞図筆 留客江村・西峯挿天の詩 絹本墨書

双幅

松平春嶽筆軸裏書「張瑞図之幅 留客江村 春嶽蔵」張  
瑞図之幅 西峯挿天 春嶽蔵

〔張瑞図〕

明代十六世紀後期の人。字は長公、号は二水・白毫庵道者。  
建極殿大学士をつとめた。書家として著名で、画もまた得意と  
した。

(19) 僧 契冲筆 和歌短冊の折本 紙本墨書 五十枚

松平春嶽筆箱書「予未だ隠居前於越前商人より献呈之物也。  
有名ナル契冲之五十枚之真蹟也。永世子孫珍藏スベシ。明治  
十一年八月廿二日 正二位松平慶永(印)」

〔契冲〕

江戸前期の国学者・僧。寛永十七年(一六四〇)に生まれた。  
十一歳で出家、真言宗の仏学を修めた。大和・河内などを流浪  
したのち、四十歳で妙法寺住職となり、五十一歳の時、近くの  
円珠庵に隠居した。この間、専ら古典に親しみ、歌学者下河辺  
長流との交わりもあつて『万葉集』の研究に専念し、天和三年  
(一六八三)頃から水戸藩主徳川光圀の依頼で『万葉集』の注  
釈書である『万葉代匠記』を著わすなど万葉学の発達に貢献し  
た。契冲の学問は、長流の感化と水戸家の援助によるところが  
多いと言われるが、やがて荷田春満・賀茂真淵・本居宣長らに  
継承されて発展し、国学として大成した。元禄十四年(一七〇  
一)正月二十五日寂す。年六十二。

(20) 賀茂真淵筆 古今哥集の文 紙本墨書 一幅

松平春嶽筆軸裏書「加茂真淵翁真蹟 春嶽愛玩」

〔賀茂真淵〕

元禄十年(一六九七)遠江国(静岡県)敷知郡伊場村の神主  
定信の次子として生まれた。浜松の本陣梅谷家の養子となつた  
が、京都荷田春満の門に入って国学を修め、国学者として多く

の門人を持ち、御三卿の一田安宗武の招聘に応じて家臣となり、  
ますます研鑽に努めた。真淵は、当時の儒者が漢学に心酔する  
のを憂え、これを排斥して古学の復興を唱え、『万葉集』を中心  
として、古典の研究・古道の復興・古代歌調の復活に没頭し、  
その名声を高め、門人から本居宣長・荒木田久老・加藤枝直ら  
多くの国学者を輩出した。『万葉考』『歌意考』『祝詞考』など多  
くの著書があり、一三七部・三八一巻に及ぶ。明和六年(一七  
六九)七十三歳で歿す。

(21) 賀茂真淵筆 『源氏物語』『落窪物語』

『徒々草』の写本 紙本墨書 二十八冊

(22) 太田垣蓮月筆 和歌短冊の折本 紙本墨書 二十八枚

〔太田垣蓮月〕

寛政三年(一七九一)伊賀上野の城主藤堂某の子として生ま  
れ、知恩院に仕えた太田垣光古の養女となり成長した。美貌聡  
明で幼少から和歌をよくし、武技にも長じたが、子供や夫と早  
く死別するなど、家庭的に恵まれなかった。そのため、剃髪し  
て尼となり、千種有功に入門して本格的に和歌を学び、堂上風  
の気品と、桂園風の清新とを兼ねそなえた名歌を数多くのこし  
た。また自詠の和歌を彫った陶器を焼き、世に「蓮月焼」と称  
して、その雅高優美なるを称賛され、珍重されている。明治八  
年八十五歳で歿した。

(23) 岡田顕忠筆 手習手本 紙本墨書 二十点

松平春嶽筆包紙表書「慶永筆之師 岡田李太夫手本 慶永

記」

(24) 鈴木重胤筆 「歳暮の歌」

ほかの和歌書付 紙本墨書

〔鈴木重胤〕

二十五点



文化九年（一八一二）淡路国（兵庫県）津名郡仁井村の庄屋重威の子として生まれる。幼名雄三郎、通称勝左衛門。はじめ檀廬舎、のち巖檀本と号した。幼くして才識あり、江戸に出て国学を学び、さらに諸国を遊歴して学風をひろめた。また平田篤胤に書信をもつて教えを受け、深く心酔して『祝詞講義』『日本書紀伝』を著述したが、その学説につき平田家に咎められ破門された。しかし、重胤の名は篤胤と並び称されるに至った。文久三年（一八六三）五十二歳の時、奸吏と通じ正義を害せんとしたと疑われ、江戸本所小梅の宅で暗殺された。

(25) 橘 曙覧筆 和歌短冊の折本 紙本墨書 二十六枚

いずれも曙覧より春嶽に献呈したもので、「詠四時花八首」八枚のほか、春嶽の曙覧宅訪問の感激を詠じた著名なものなども含まれている。

〔橘 曙覧〕

文化九年（一八一二）福井城下石場町（つくも一丁目）の紙商正玄五郎右衛門の長男として生まれた。幼名は五三郎、はじめ尚事、のち曙覧と改めた。正玄家は朝倉氏時代からの旧家として知られた木田橘七屋敷の一つである。少年時代は府中（武生）の母の家で養育され、日蓮宗妙泰寺明導に就き仏教を学び、のち京都へ遊学して児玉三郎から漢学を学んだ。しかし、我国の古典の研究に志して家を異母弟宜に譲り、足羽山に隠棲（黄金舎）し、飛驒高山の国学者田中大秀に入門して大いに得るところがあった。三十七歳の時、三ッ橋（照手三丁目）に移り、以後この家を藁屋と号した。曙覧の歌人としての業績は、ほとんどこの藁屋でなされ、のち松平春嶽によって志農夫廬舎と改められた。清貧の中で国学と作歌に精進し、近世末期の国学の精神に燃えて、独自の歌風を樹立したが、慶応四年（一八六六）八月、五十七歳で歿した。

(26) 高山彦九郎筆 叔父正業墓前献歌 紙本墨書 一幅

松平春嶽筆軸裏書「高山彦九郎真筆 春岳玩賞」

〔高山彦九郎〕

延享四年（一七四七）、上野国（群馬県）新田郡細谷村の郷士の家に生まれる。名は正之、通称を彦九郎といった。祖先が新田氏につながることから、尊王の志を起こし、諸国を行脚して大いに勤王精神を発揮した。しかし、そのために幕府の嫌疑を受け、寛政五年（一七九三）久留米に追いつめられ、四十七歳で自刃した。世に、蒲生君平・林子平とともに「寛政三奇人」と称せられる。

(27) 松平定信筆 古歌手鏡 紙本墨書 一帖

幼・少年期より従祖父にあたる松平定信を敬仰していた春嶽の愛蔵品で、もと春嶽の実父田安齊匡が、叔父定信に揮毫を依頼し、衝立として秘蔵していたものである。

〔松平定信〕

宝暦八年（一七五八）、御三卿の一家田安宗武の第七子に生まれ、徳川吉宗の孫にあたる。楽翁・旭峯と号した。奥州白河城主松平定邦の養子となる。定信は窮乏する藩財政の立直しをはかるため儉約を命じ、文武両道の伝習・普及を促した。また天明七年（一七八七）田沼意次失脚後、老中首座となって幕政を担当し、民政の安定と幕威の振興とを期して、「寛政の改革」を断行した。文政十二年（一八二九）七十二歳で歿す。

(28) 橋本景岳・頼三樹三郎筆 「半生落魄云々」

「掩門深坐云々」の詩 紙本墨書 一幅

松平春嶽筆箱書「頼三樹・橋本左内真蹟 春嶽清玩」

春嶽が、国事に奔走し、共に安政大獄で倒れた二人の志士の遺墨を合装して、往時をしのぶよすがとしたものである。

〔橋本景岳（左内）〕

天保五年（一八三四）福井藩医の家に生まれ、十六歳で大坂緒方洪庵の適塾に入門、二十一歳の時、江戸に遊学、坪井信良・杉田成卿の教えを受け、早くより英才の聞えが高かった。藩主松平春嶽に、その学才と識見を認められ、安政三年（一八五五）二十二歳で医員を免ぜられ、藩政に参与し、藩内の教育に努力した。將軍継嗣問題が起るや春嶽のもと一橋慶喜を擁立すべく、京都・江戸に活躍、大いにその抱負を行なわんとしたが、安政五年（一八五八）安政大獄に捕えられ、翌六年十月二十六歳で斬に処せられた。

〔頼三樹三郎〕

尊攘派の志士、儒者。文政八年（一八二五）頼山陽の子として生まれる。名は醇、鴨厓、古狂生と号した。はじめ、父の門弟兒玉旗山や後藤松陰に入門、さらに羽倉簡堂に伴われて江戸に出、昌平齋に学んだ。弘化三年（一八四六）東北・蝦夷地から北陸への遊歴の旅に出たが、父の影響で勤王の志をいだき、梁川星巖・梅田雲浜らと親交を結んで国事に奔走した。対米条約勅許・將軍継嗣問題では幕政を批判し、終始一橋慶喜擁立を策した。そのため安政大獄に連座し、安政六年（一八五九）三十五歳で刑死した。

(29) 岩瀬忠震筆 「海航誰自云々」の詩 紙本墨書 一幅

松平春嶽筆箱書「岩瀬肥後守真蹟 橋本左内所贈 春岳玩賞」

〔岩瀬忠震〕

修理・肥後守などと称す。幕末三俊才の一人に数えられる。

文政元年（一八一八）旗本の家に生れ、老中阿部正弘に抜擢されて目付となり、外交・海防事務に従事した。安政四年（一八五七）、日米通商条約交渉の全権委員となり、翌年、老中堀田正睦に従って条約勅許問題解決のため京都で奔走したが失敗、

井伊直弼の大老就任後は、総領事ハリスとの交渉を命ぜられ、困難な条件のなかで調印にこぎつけた。ついで外国奉行として活躍したが將軍継嗣問題で一橋慶喜を推したことから退けられ、免職・差控の処分をうけた。文久元年（一八六一）歿す。

(30) 西郷隆盛筆 「世上毀誉云々」の詩 紙本墨書 一幅

松平春嶽筆軸裏書「明治二年三月千本貫一呈ス 南洲西郷隆盛詩真筆 春嶽愛玩」

〔西郷隆盛〕

通称吉之助、南洲と号す。文政十年（一八二七）薩摩の下級藩士の子として生まれたが、藩主島津齊彬に取り立てられ、側近として活躍した。禁門の変・第一次長州征伐では幕府側に立ったが、第二次征討以後は討幕派の指導者として薩長同盟・王政復古・戊辰戦争を指導遂行し、維新政府の参議となった。のち征韓論に敗れて官を辞し、鹿児島私学校を中心とした士族層に推されて西南戦争を起こしたが、明治十年四十九歳の時、鹿児島城山で自刃した。

(31) 木戸孝允・西郷隆盛・藤田東湖・小松帯刀・田宮如雲

・小原鉄心筆 「六賢遺墨」の幅 紙本墨書 一幅  
表記六名の書翰と、明治十二年一月付の春嶽筆由緒書が一幅

に合装されている。春嶽の由緒書によると、木戸・藤田・小松・田宮・小原の中根雪江宛書翰を入手した春嶽が、以前より所蔵していた西郷の書翰を加えて表装し、「六賢遺墨」と題して愛蔵したものである。

〔木戸孝允〕

天保四年（一八三三）長州藩士の子として生まれ、桂家を継ぎ、のち木戸と改称、名は貫治、小五郎と称し、松菊・木圭と号した。嘉永二年（一八四九）吉田松陰の門に入り、のち江戸に出て齋藤彌九郎に剣術を学ぶ。任官後、江戸・京都にあつて

藩務に励むとともに、諸公卿間を周旋するなどして尊攘運動の中心に立ち、維新後は、徴士・総裁局顧問・参議などを歴任し、版籍奉還、廢藩置県を推進した。明治十年（一八七七）病歿。

〔藤田東湖〕

水戸学派の儒学者。文化三年（一八〇六）水戸藩士藤田幽谷の子として生まれる。名は彪、虎之助と称す。江戸に出て亀田鵬齋らに学び、文政十年（一八二七）父のあとを継いで彰考館編修、さらに総裁代理となる。藩主継嗣問題で徳川齊昭を擁立し、藩政改革を推進するとともに、橋本景岳・横井小楠・西郷隆盛らと交遊して、尊王攘夷派志士の信望を集めた。安政二年（一八五五）の大地震で圧死した。

〔小松帯刀〕

名は清廉。天保六年（一八三五）薩摩喜入領主肝付兼善の三男として生まれ、小松清猷の養子となった。文久元年（一八六〇）藩主島津忠義の側役として藩政に参与し、大久保一蔵（利通）などの人材を登用した。のち家老に昇進、京都にあつて討幕運動・大政奉還のため尽力する一方、西郷隆盛・大久保利通・坂本龍馬らとはかつて薩長同盟を結んだ。維新後、徴士・参与職、総裁局顧問・外国官副知事を歴任、明治三年（一八七〇）病歿した。

〔田宮如雲〕

文化五年（一八〇八）尾張藩士大塚家に生まれ、のち田宮家を継いだ。名は篤輝、弥太郎と称し、如雲・桂園と号した。早くより才能を認められて藩政の中枢に参画し、人材登用・儉約政策に力を注ぎ、藩内尊攘派の長老格として、藩主慶勝を補佐した。安政の大獄では幽閉に処せられたが、ゆるされて後は藩内の士気振興につとめ、元治元年（一八六四）慶勝が総督に任ぜられた第一次長州征討を指導した。維新後、新政府参与、更に

藩の大参事として諸政改革に手腕をふるい、明治四年六十四歳で病歿した。

〔小原鉄心〕

美濃大垣藩の家老。文化十四年（一八一七）に生まれる。名は忠寛、通称二兵衛、鉄心と号す。天保の飢饉と連年の指斐川氾濫による藩民困窮の中で、藩政改革の中心人物として活躍した。各地の名士と交つて勤王藩への下地をつくり、蛤御門の変では長州軍の鎮圧に活躍し、維新後は新政府の参与に任ぜられた。三代の藩主に仕えた大垣藩の柱石として尊敬されたが、明治五年五十六歳の若さで病歿した。

(32) 佐久間象山・水野忠徳・

岩瀬忠震筆 「三英遺墨」の幅 紙本墨書 一幅

松平春嶽跋文「佐久間象山より中根雪江ニ贈りたる書翰、水野筑後守手翰、岩瀬肥後守橋本左内へ贈りたる書状、こたび雪江子牛介より呈す。余ハ此三通をみて追想往時而不已、距今十六・七年以前也。今日これを見れば水野・岩瀬・雪江左内に面晤スルノ心持せり。余之を跋とす。明治十四年十月慶永（印）」

表記三名の中根雪江・橋本景岳宛書翰に、春嶽が右記跋文を添えて一幅に仕立て愛蔵していたもので、表題は三人の英才の遺墨といった意味で、春嶽が名付けたものである。

〔佐久間象山〕

幕末の兵学者・洋学者。文化八年（一八一二）信濃松代藩士佐久間国善の嫡男として生まれる。名は国忠、のちに啓・大星。通称修理。天保四年（一八三二）江戸に出て佐藤一齋の門に入り、のち神田に私塾を開いて藩邸の学問所頭取となった。天保十二年（一八四一）藩主真田幸貫が老中として海防掛を担当するに当り、顧問として海外事情を調査、更に蘭学・砲術学を極

め開国論を唱えたが、元治元年（一八六四）攘夷派に暗殺された。

〔水野忠徳〕

幕臣。筑後守・下総守。文化七年（一八一〇）に生まれる。

甲子二郎と称し、痴雲と号した。阿部正弘に登用され、嘉永五年（一八五二）以降、浦賀奉行・長崎奉行・勘定奉行・外国奉行・軍艦奉行などの要職を歴任し、幕政改革と外交問題に手腕を振り、対米条約調印や横浜開港問題を処理した。將軍継嗣問題が生ずるや、一橋慶喜擁立派として重要な活動をした。慶応四年（一八六八）歿す。

(33) 安島帯刀・茅根伊予之介・

橋本景岳筆 「三友遺墨」の幅 紙本墨書 一幅

松平春嶽筆箱書 「三友遺墨」ハ何ゾ、雪江ノ三友トスルハ水戸藩ノ安島弥次郎後帯刀、同藩茅ノ根伊予之介、及我藩橋本左内也。雪江歿後其子牛介ニ所望シテ譲受ケタリ。予モ左内ハ師友トスル所也。安島・茅ノ根両士ハ、余共ニ語りテ素志ヲ同フスル人ナリ。予ノ珍藏不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>之ナリ。明治十一年五月十六日 春嶽永

中根雪江が、安政大獄にたおれた三人の旧友の書翰に、藩儒矢島立軒撰文の識語を自ら書写して跋文とし、一幅に仕立てたもので、雪江の歿後春嶽が譲り受けて秘蔵したものである。三人の書翰が書かれた時期は、井伊直弼の大老就任によって事態がこれらの人の意向に反する方向に動きつつあった頃であるが、内容は日米通商條約締結、將軍継嗣、幕閣改造などの問題について、苦慮し奔走した事柄に関連し、史料としても極めて重要である。

〔安島帯刀〕

文化九年（一八一二）水戸藩士戸田忠之の次子として生まれ、

同藩士安島家を継ぐ。名は信立、通称を弥次郎といい、帯刀と改める。文政十二年（一八二九）、藩主継嗣問題に実兄とともに齊昭を擁立し、郡奉行・勘定奉行・小姓頭に累進して藩政にあたった。しかし、弘化三年（一八四六）齊昭処分幕命撤回をはかった罪を問われて幽閉され、のち執政に復帰して国事に奔走したが、齊昭処分藩命撤回・水戸藩下付の密勅回達の問題の責任を追求され、藩命により自刃した。

〔茅根伊予之介〕

文政七年（一八二四）水戸藩士茅根為敏の子として生まれる。名は泰、寒録と号した。幼少より学問を好み、藤田東湖・会沢正志齋に矚目された。天保十三年（一八四二）より徳川齊昭に近待し、弘道館舎長となつて藩内子弟の教育に力を注いだ。嘉永六年（一八五三）ペリー来航に憤激して上書、その後郡奉行・奥祐筆頭取・小姓頭取・藩主慶篤の侍読など歴任したが、安政六年（一八五九）幕府に召喚され、齊昭の京都入説、一橋慶喜の將軍継嗣擁立の責任を問われて斬罪に処せられた。

(34) 松平春嶽所用 落款印章類

九十三顆

春嶽が生涯を通じ愛用した全印章類で、書画揮毫時の落款印から、各種公印・私印まで多種である。慶応四年（一八六八）六月、山内容堂が自ら刻んで春嶽に贈呈した「春岳真逸」の印をはじめ、春嶽の学問や思想をよく示す神代文字の印など、珍しいものが多い。

### 三、文 具

(35) 本間琢齋作 斑紫銅水滴

〔本間琢齋〕

一点

文化九年（一八一二）越後（新潟県）刈羽郡の鑄工原得齋の長男に生まれ、のち佐渡五十里村の本間家を継いだ。維新前までは専ら大砲鑄造に従事したが、その後は美術品製作に力を注ぎ、明治五年（一八七二）斑紫銅の技法を開発、ウィーン万国博覧会に出品して受賞し、琢齋銅器の名を高めた。作品には人物像・置物・花瓶・香炉・文具・茶器などがあり、米国・中国・南洋諸国にも輸出され、明治期を代表する鑄銅工芸家とはなつたが、明治二十四年（一八九一）八十歳で歿した。

(36) 筆架類

① 島雪齋作 黒檀靈芝形・黒珊瑚魚形・

黒檀観音形・蓮華形筆架

四点

〔島 雪齋〕

文政三年（一八二〇）三国の木工清治郎の子として生まれる。幼名又吉、雪齋と号し、後年「法橋」の称号を授けられた。十一歳の時、父と死別したが、彫刻に志を立て、志摩乗時に入門して修業、自宅で彫刻業を開いてのちも、加賀大野の弁吉、長崎の篆刻師石齋について学ぶなど、その修練を怠らなかつた。そのため、またたく間に名工の評判を得、福井十六代藩主松平春嶽の御手許御用職人に取り立てられ、作品を皇室や将軍家へ献上するなど破格の厚遇を受けた。維新後、オーストリアのウィーン万国博覧会へ野馬の置物を出品し、一等賞に選ばれるなど、その実力を海外でも発揮した。明治十二年（一八七九）六十歳で病歿。

② 交趾焼 蟹形筆架

一点

交趾焼は中国南部の諸窯で製作された陶器。軟陶型作りを主とし、緑・黄・紫の三彩からなる交趾釉が施される。

(37) 硯・懐中硯

① 紫檀蓋付硯 銘「雲月」

一点

② 兔模様木硯

一点

③ 羅紗張箱入懐中硯

一点

④ 絵具用懐中硯 銘「秀気」

一点

(38) 周永字製唐墨等古墨類

二十点

(39) 矢 立

① 島雪齋作 紫檀製葵紋付矢立

一点

② 島雪齋作 竹製雲龍模様墨壺付矢立

一点

(40) ドイツ・ニュルンベルグ製シャープペンシル

九点

(41) その他の文具類

象牙製唐紙切・銀象眼銅製文鎮

青磁硯屏・蓮形筆洗ほか

十点

四、各種調度

(42) 瀑布眺望図蒔絵桑製小簞笥

蒔絵部分 古満巨柳・栄川院狩野典信合作

一具

〔古満巨柳〕

安永・天明（一七七二〜八九）ごろの人。木村七右衛門といひ、幕府御抱の蒔絵師五代古満久伯の門人となつて、古満の姓を許された。巨柳齋ともいい、当時の蒔絵工芸家中第一の名手といわれ、余暇に機巧人形も作つた。

〔狩野典信〕

木挽町狩野派栄川古信の子。名を典信といい、白玉齋と号す。画法を父古信に学び、のち法印に叙せられ栄川院と称し、将軍徳川家治に厚遇され、旗本に列した。寛政二年（一七九〇）六十二歳で歿す。

(43) 堆朱小簞笥 付田安齊匡所用

黄銅製万歩計など小物遺品類

十二点

春嶽が、実父田安齊匡の形見として愛蔵したもので、簞笥内には表記万歩計のほか、日時計・磁針付根付、銀桜花模様酒盃など、齊匡の遺品十二点が収められている。

(44) 玉川蒔絵菓子簞笥 一具

外箱に、春嶽の所用品であることを示す「丁字印」の朱印がある。以下の品々にも、同様の朱印や書込みがあつて、春嶽の愛用品であつたことが知られる。

(45) 葵紋蒔絵黒塗提御用箱 一具

手提形錠付の御用箱で、内部三段の引出しのうち最上段が視箱となつている。

(46) 革張山水模様錠付手文庫 一具

(47) 四季花模様蒔絵火屋付手焙 一具

黒漆塗地に梅・桜・牡丹・菊・椿など四季の花を蒔絵した木製火鉢に、輪違模様を枠に銀象眼した火屋をのせた小形手焙梨地藤棚模様蒔絵提重 一具

提重は花見など行楽時の飲食器で、重箱・酒器・小皿等が一箱に収納され、携帯可能に工夫されている。

(49) 黒地網に桜花模様蒔絵七寸重箱 一具

(50) 黒地金葵紋蒔絵八寸重箱 一具

(51) 銀製葵紋付道中爛子 一具

旅行用の湯わかし器で、水槽とこれを加熱する炭火用の炉とが一体に組込まれている。

(52) 銅製籠形香炉 一点

銘「大明宣徳年製」

「大明宣徳年製」の銘があるいわゆる宣徳銅器は、明の宣宗の治下宣徳三年（一四二八）に铸造されたもので、我国にも多数渡来している。また、これを模した銅器も、一般に宣徳銅器と称している。

(53) 銅製登龍門香炉 一点

登龍門とは、黄河の龍門と呼ばれる急流の下に鯉などの魚が集まり、多くはこの龍門を登り得ないが、もし登れば龍に変身するとの故事から出た言葉で、立身出世の関門の意味で用いられる。本品は、龍門を登り切つて頭から龍に変じていく鯉の姿を表現した珍しいものである。

(54) 銅製乗馬人物香炉 一点

(55) 紫檀製提煙草盆 付火箸・灰押等付属小道具一式 十三具

(56) 島 雪齋作 柿本人麻呂木彫座像 一躯

銘「法橋雪齋謹鑄」

柿本人麻呂は、『万葉集』中第一の抒情歌人で、山部赤人と共に古くより歌聖と仰がれ、平安時代以降は、人麻呂の像を祭つての宗教的行事が舉行されるに至つた程の万葉歌人である。国学や歌道に造詣の深かつた春嶽も、御抱職人雪齋に命じてこの像を彫らせ、歌聖と敬仰して奉祭していたものと思われる。

(57) 棚置物類

① 島 雪齋作 百老竹置物 一点

② 自然木寿星像置物 一点

寿星は、南極老人星の異名。その化身で、延命を司るとい

う老人像をかたどつたもの。 一点

③ 岩に兎の置物 一点

④ 孔雀石ほかの岩石置物 二点

## 五、その他の手沢品

(58) 島 雪齋作 橘曙覧和歌彫刻竹製鳩の杖 一点

鳩は餌を食べる時、むせばぬ鳥であると考えられたことから、古来老人の杖の頭に鳩を彫り付けることが行われた。本品は、

雪齋が春嶽のため製した鳩の杖で、橘曙覧の「男山云々」の和歌が彫り付けられている。

(59)馬山 作 小原鉄心詩彫刻竹製杖 一点

大垣藩老小原鉄心が、養老山中で採取した竹を用いて、馬山なる彫刻師に命じ、自作の漢詩と杖頭の龍を彫らせ、春嶽に献呈したものである。

(60)携帯用茶道具 一式

(61)時計並びに付属品

①オルゴール付枕時計 一点

嘉永元年（一八四八）四月、春嶽が十三代徳川家慶將軍より拝領の品で、下部に舶来オルゴールが組込まれている。家臣鈴木準道の由緒書に、「御秘蔵器也」とある通り、春嶽秘蔵の珍しい品である。

②舶来・国産クロノメーター 二点

観測用精密時計で、本体が常に水平を保つよう装置されている。舶来品は幕末から明治初年の英国リバプール製で、今日も正確に作動する。国産品は明治初期、舶来品をもとに製造されたもの。

③舶来金・銀懐中時計 二点

④ガラス被付懐中時計掛 二点

(62)各種科学器械類 十五点

方位測定機・バロメーター・正午盤・寒暖計などからなる舶来科学器械類。早くより進んだ西欧の科学技術導入に熱心であった春嶽が、収集愛用した品々である。春嶽の慶応年間（一八六五～七）の日記を見ると、こうした機器を旅行にも携行して、常に時刻・気温・気圧などを観測していた様子がうかがわれる。

(63)御拝領御大切之御細工物 七十六点  
松平春嶽筆箱書「天保九年（一八三八）戊戌十一月二十三

日、慶永当家へ引移り、其日朝登城平川口よ家齊公・家慶公謁見御手自拝領、大奥より預り。慶永手記」

天保九年十一歳で福井藩主に就任した春嶽に対して、伯父にあたる將軍が贈った玩具類。銀製のものを中心に、水晶・鼈甲・象牙等を用いた二、三センチ内外の小形で精巧な細工物類である。

(64)大・小刀拵ししとま 一組六点

春嶽常用の大小拵で、鯉鱗包鞘の外に、替鞘として蛇皮包のもの、青貝で梵字をあしらった石地塗の鞘が付いている。その他の意匠・付属品は左の通りである。

柄 白鯨。縁・頭 四分一野瀑し。

目貫 (大)赤銅色絵独鈷。(小)同州浜。鐔 鉄無地金銀三日月

象眼。銘「越州住明珍吉久作 象眼記内作」

小柄 (大)銀魚子地赤銅色絵観音 後藤程乗作。

小刀 美濃介直胤作。

(小)金無垢地赤銅海老 磁石付。小刀 国房作。

(65)黄唐茶系緘二枚胸具足 一領

(66)骨牌札置具足 一領

カルタ形（長方形）の桐崩絞銀象眼鉄札並びに同銀鍍金鉄札をつなぎ合わせ、折りたたみも可能にした実戦用の甲冑。胴部は右記鉄札の下に、ぶ厚い鉄胴を組込むなど、主要部はすべて二重・三重の防禦が工夫され、火器に対する備えが充分に考慮されている。

(67)白糸緘陣羽織 一領

羅紗・革などで製された通常の陣羽織と異り、牛皮を黒漆塗にした大型の小札を白糸で緘し、立襟の内部にも亀甲形の鉄板を縫込むなどした珍しい形式で、これのみでも、刀・槍に対しては相当の防備が期待される優品である。

(68) 仏具類

① 島 雪齋作 伽羅木白衣観音線香建 銘「雪齋謹刀」 一点

② 島 雪齋作 象牙雲龍彫線香建 銘「法橋雪齋謹刀」 一点

③ 芳 齋 作 竹製梅花模様線香筒 一点

④ 木実製十六羅漢数珠 一点

(69) 手廻諸道具類 三十点

春嶽が日常身近かに置いて常用した手廻品類で、手鏡・眼鏡・呼鈴・喫煙具などの日用品をはじめ、生薬入・犀角盃・洋式燧道具等珍しい品も数多い。

本目録の編集に従事した館員は、左の通りである。

執筆 伴 五十嗣郎

原 直樹

西村 英之

柴田 欣治

平 弦月

山本 喜代美

表紙デザイン  
図版レイアウト  
撮 影 右記全員

昭和56年度秋季特別展

松平春嶽公

手沢・愛蔵品展

—解説総目録—

発行 昭和56年10月1日  
編集 福井市立郷土歴史博物館  
福井市足羽1丁目8-16  
印刷 河和田屋印刷株式会社  
福井市一本木町88





谷 文晁筆 叢竹の図屏風

AUTUMNAL SPECIAL EXHIBITION  
"Matsudaira Shungaku's  
TREASURED ANTIQUES"  
FUKUI CITY MUSEUM OF HISTORY

10/1 ▶ 11/5, 1981